

週日の説教（聖マリアの誕生の祝日）

金 大烈 神父 2009年9月8日（火）

《マリア様と痛みを抱きしめて真珠を産む貝》

今日は、マリア様のお誕生日です。マリア様のことを黙想してみた時、思い浮かんだのは『真珠』のことでした。『真珠』をご存知ですよ。貝の中に作られる『真珠』が思い浮かび、このように考えてみました。

皆様、真珠がどのように作られるかそのプロセス（過程）をご存知ですよ。砂の上にいる貝は、動くことで、小さい石や砂が体の中に入り傷がつきます。その途端、貝殻と同じ成分のものを体から分泌し、それで、石や砂などの異物を包み込みます。包み込むことで石や砂などの異物はだんだん真珠になるのです。結局、真珠の条件は傷です。その傷を体に抱きしめながら、痛みの中で待つことです。傷を癒すために、どのくらいの痛みを払いながら真珠を作っているのか黙想してみますと、貝が一つの真珠を作るために、どのくらい痛みを感じているのかが分かるような気がしました。

今は、天然の真珠はほとんどありません。商品にしたいくてもほとんど見つからないそうです。だから、最近では養殖をして、人工の真珠が生産されています。養殖で真珠を作る時には、傷をつけるために「核」というものをわざわざ貝の体の中に入れます。その「核」となるものへの貝の反応から、真珠が生じるのです。しかし、真珠ができるまでには、傷がついてから大体2年から3年かかるのだそうです。3年かかって生じた真珠の中でも、50%は商品にならなくて捨てられてしまいます。そして、残りの50%のうち、統計的に見て28%位が良いものとして売られるのだそうです。

さあ皆様、なぜマリア様から真珠の生成過程が思い浮かんだのかを説明しますと、そのような痛みを抱きしめて真珠を産む貝の物語を考えてみたら、私たちが母と呼ぶ聖母マリア様と本当に似ているのではないかと思ったのです。

乙女の身で、男の人を分からないうちに身ごもります。身ごもって、婚約者であるヨセフからも縁を切ろうと思われてしまう女性としての痛み、そして結局、今日の福音(マタイ 1・18 23)の中で話されたように、彼女を妻として迎え入れたヨセフとの結婚生活が始まります。しかし、出産の時には産む場所がなくて馬小屋で出産をし、赤ちゃんを飼葉桶かいばおけに寝かせます。産後、体力を取り戻す時間もないうままエジプトへ逃げます。自分の故郷であるナザレに帰ってきた後も、経済的に豊かな生活をすることはできません。夫のヨセフの仕事は大工です。当時、ユダの大工は今の時代のように評価を得られる職業ではありませんでした。何とか一日の食べ物を求められるくらいの職業です。

そのような中、息子であるイエス様は順調に育ち、30歳になり、ある程度家庭のために仕事ができるようになります。ところが30歳になると、家を出て行ってしまいます。痛みを体験しながら産み、難しさを全部乗り越えて育ててきた息子なのに、1人で出て行ってしまいます。そして、いろいろな噂が聞こえてきます。気遣いだ、政治犯だ、やくざの親分だ、人を扇動して騙している、と。良い便りは殆ど聞こえなくて、悪い噂だけが聞こえます。その時もマリア様は黙っていらっしやいましたね。

そして3年後、そのように産んで育て、いつも祈らなければならなかった息子を自分の目の前で十字架につけられてしまいます。その最後の姿は、自分の胸で死んだ息子を抱きしめている母の姿です。それを私たちは「ピエタ（ピエタの聖母）」と呼びます。それは考えられないような痛みです。

いろいろな人々と面談をして相談にのると、いろいろな話を聞きます。「私は難しい状況である。」「疲

れる。」「どうすればよいか全く前が見えない。」という人々もたくさんいらっしゃいます。しかし、率直に言いますと、マリア様のことを考えれば、本当に贅沢な文句ばかり言っているのが私たちの弱さではないかと思えます。そのくらい大きな痛みを乗り越えられた方なので、神様も感動されたのでしょう。そのため、私たちは彼女のことを「お母さん」と呼んでいます。

今日、マリア様の誕生日に、私たちはこのようにミサを捧げています。しかし、もし彼女の人生をよく黙想できているのならば、その誕生自体を祝うことだけでは足りません。彼女がいろいろな難しさを乗り越えて、神様の母と呼ばれるくらい苦勞をなされたこと、特に神様に対しての信頼を持ち、自分を襲った全ての苦難に打つ勝たれたことを黙想して、「あなたは私たちの模範です。あなたによって私たちは取次ぎを求めます。」という祈りが出来てから、今日の誕生日を心をこめて喜ばなければならないと思えます。

皆様、結局傷のない人間はいるでしょうか。いないと思えます。傷を受けるのをあまり怖がらないでください。傷を受けたことで子どものように甘えないでください。その傷が単なる傷で終わるか、自分を一番相応しいものに作るために必要なものとなるか、もう一度考えてみましょう。逆境のない人生はあるでしょうか？ ありません。傷のない人生はあるでしょうか？ ありません。その時、「痛い」と子どものように泣かないでください。その傷に、私たちの母が見せてくださったその模範に、従ってください。「この傷も私にとって神様のみ旨があるのだろう。この痛みをどのようにすれば真珠にすることができるのか。」そういうことを考えてみましょう。

そういう意味で、カトリックはいつも希望的です。何に襲われても私たちは希望をあきらめません。落胆やがっかりすることがいろいろあると思えます。人を殺したくなるくらい傷がある人もいるかもしれませぬ。しかし、その傷自体に意味を置かないでください。傷は傷です。その傷を、傷のためではなく、傷によって立ち上げられる、という心を好むのが一つの信仰の実りではないかと思えます。

感謝します。